裁判員経験者の意見交換会議事要録

日 時 平成27年2月17日（火）午後3時00分から午後5時00分

場 所 横浜地方裁判所小田原支部大会議室

参加者等

司会者 佐藤 晋一郎（横浜地方裁判所小田原支部刑事部部総括裁判官）

裁判官 牛島 武人（横浜地方裁判所小田原支部刑事部裁判官）

検察官 尾江 雅史（横浜地方検察庁小田原支部検察官）

弁護士 橋本 乃亜（横浜弁護士会所属弁護士）

裁判員経験者1番 50代 女性（以下「1番」と略記）

裁判員経験者2番 50代 女性（以下「2番」と略記）

裁判員経験者3番 60代 男性（以下「3番」と略記）

裁判員経験者4番 40代 男性（以下「4番」と略記）

裁判員経験者5番 40代 男性（以下「5番」と略記）

（記者クラブ記者 1名）

議事要旨

（司会者）

それでは、これから意見交換会を始めさせていただきます。予定としましては、1時間たったところで1回休みをとれるような形で進めたいと思います。

では、趣旨を簡単に御説明申し上げます。裁判員裁判が始まりまして、既に5年9か月が経過いたしました。小田原支部におきましても67件、裁判員裁判がこれまで終了しております。本当にお集まりの皆様を含めまして、皆様いずれも非常に真剣、誠実に裁判員として事件に取り組んでいただきました。本当に深く感銘を受けているところでございます。

裁判員裁判は、おかげさまでおおむね順調に推移しているというところではございますけれども、運用につきましてはまだまだ改善をすべき点がたくさんございます。この制度をより良いものにしていくためには、検討と工夫、見直し、そういう

ふうなことを常に続けていく必要があるというふうに考えております。

裁判の終了の直後に皆様方からはアンケートなどで御意見や御感想などを頂いております。本日は、それからある程度時間がたった現時点におきまして、裁判員裁判を務めていただいた御経験がどのようなものであったのか、あるいは裁判官、検察官、弁護人にどのような課題があったのか、そういうふうなことにつきまして御自由にお話しただければというふうに思っております。

裁判官、検察官、弁護人にどのような工夫や努力が必要なのか、是非忌憚のない御意見を頂きまして、より良い裁判員裁判の実現に役立てていければというふうに思っております。

なお、この意見交換会で発言された内容につきましては、後日、議事録が作成されまして、裁判所のホームページに掲載される可能性もございますので、この点につきましてよろしくお願いたします。

では、まず参加しております裁判官、検察官、弁護人、それぞれ自己紹介を致します。

(裁判官)

裁判官の牛島でございます。1番から3番の方とは一緒に事件をさせていただいたということで、この場で再会させていただいたことを非常にうれしく思っております。それから、4番の方と5番の方とは初めましてという形になりますが、こうして皆様の意見を聞ける機会というのを、私、非常に楽しみにしておりましたので、是非、今日はいろいろと、時間がたってお考えが熟成されたところで、ひとつ忌憚のない御意見をお伺いできればなというふうに思っております。どうぞよろしくお願いたします。

(司会者)

では、検察官。

(検察官)

検察官の尾江と申します。よろしくお願いたします。

私、意見交換会という場に出席するのはほぼ初めてですので、今日は非常に楽しみにしております。是非、批判的な見地からいろいろな御意見を頂ければ、それを持ち帰って今後の裁判員裁判に活かしていきたいと思っていますので、よろしくお願いいたします。

(司会者)

では、弁護士、お願いします。

(弁護士)

弁護士の橋本と申します。よろしくお願いいたします。

私は裁判員裁判は3件担当させていただいたんですけれども、いずれもちょっと難しい課題等もございまして、裁判員の方からも是非御意見を頂きまして、今後の弁護活動に活かせるように持ち帰って協議させていただきたいと思いますので、どうぞ御意見のほどよろしくお願いいたします。

(司会者)

それでは、早速、まずテーマ1からということで皆さん、よろしくお願いいたします。

まず、経験された全般的な感想ということで、お名前の方はおっしゃっていただかないという前提でお話を進めたいと思います。いつもで恐縮なんですけど、1番の方からということでよろしくお願いいたします。

では、裁判員裁判を経験いたしましての全般的な感想ということでお願いできればと思います。

(1番)

テレビや何かのポスターなんかではよく見たことがあるんですけども、「まさか私が選ばれるなんて。」というのが本当に初めて見た時の印象でした。それから、ほかの方々も皆さんおっしゃっていたんですけども、最初に手紙が来た時に、最高裁判所からのすごい重々しいような形の封筒だったので、何か知らない間に悪いことでもしてしまったのかと思って、開けるまではもう本当にびくびくしていました。開けてみたらこういう形で、私にはちょっと重すぎるんじゃないかなと思いながら来て

みたら当たってしまいまして、何とか裁判員裁判ということで務めさせていただくことになりまして、皆さんの御支援のおかげで何とか解決できたのかなという感じでしたかね。

(司会者)

放火の事件を担当なさったということになりますかね。現住建造物の放火ということで、何か審理の中身とか評議とか、そんなふうなところで特に感想などありますか。

(1番)

そうですね。何となく、刑期とかそういうのはほとんど決まっているような形で、何年ぐらいから何年ぐらいってというのが妥当だなっていうのから、もうちょっと細かくしてみようという感じで最後の方には詰めてきましたね。そのところは、弁護士さんや検察官さんからのいろいろな情報を整えてから、このくらいがいいんじゃないかというのを覚えているんですけども。

(司会者)

今、少し中身のことをおっしゃってもらいましたけれども、また後で評議の場面でもお伺いしますので。では、2番の方、お願いします。

(2番)

私もちょうど手紙が来たのが子供の誕生日の日で、「何だろう、これ。」と思ってひっくり返したら、「え、何で裁判所。」っていうのが第一印象でした。その後に来た手紙からすると、最初の封筒がとてもカラフルだったのに、2回目に来た封筒というのがすごい暗い感じで重い感じで、ちょっとカラフルさが欲しいなと思いました。それで、実際に経験して、ある程度ルールが敷かれているなというのが第一印象。だけど、考えたらこちらはど素人ですから、そのルールがあった方がよかったというのと、あとは、佐藤さんがいつも穏やかに、にこにこ対応してくれ、牛島さんが締めて、そのおかげでこちらも何日間やっとかさっとかこなすことができたのが本音です。やはり評決の方も、「え、見本があるの。」みたいな、そういうのが納

得できなかったけれども、裁判というのが、公平というのはこういうことかなって
いうのを考えるようになりました。

(司会者)

御担当されたのは、強盗強姦未遂、強制わいせつ致傷ということで起訴されてい
た事件ということですね。

(2番)

そうです。

(司会者)

では、3番の方、お願いします。

(3番)

私が経験させていただいた、参加させていただいた事件は、加害者も被害者も暴
力団というような二人だったんですが、その傷害致死という事件だったんですね。
全く自分が分からないような世界で、当初非常に不安があったんですが、やっぱり
裁判長さんとか牛島さんとかがいろいろかみ砕いて教えてくださったり、考える方
向をリードしてくださったなっていうような感じで、何とか助けられて行けたのか
なと思っています。

当初、感じたというか、終わった後、感じたことは、こんなことはあれなのかな
とか思ってしまうのですが、暴力団同士ですよ。まさに無法者同士の事件でも、
こんな法の下に平等に裁いてもらえる日本というのはきちんとした法治国家だなと、
改めて感じたようなことがありました。

あとは、証拠とか何かよりも、もうはっきりしていましたので、論点がはっきり
していて、あと量刑の問題がすごく大きかったような感じなんですけど、先ほど2番
の方がおっしゃったように、量刑に関しては非常に素人的な考えがあったかと、改
めて平等な判断というのはこういうことなんだということを教えてもらった、知ら
された、認識したというような感じがしております。

それともう一つ、この全体的な印象として、裁判所に初めて入って感じたのは、

裁判官の方はもちろんなんですが、当たり前でしょうけれども、事務官の方は非常に徹底して黒子に徹して事務手続にミスがないように完璧におやりになっているし、女子職員の方はまるでホテルのコンシェルジュのように本当に気を使ってくださいって、ちょっとお気の毒になるぐらい、公務員なのに何でこんなに気を使われるのかなと思うぐらい、率直に感じた印象です。

(司会者)

ありがとうございます。公平さとか平等さというふうなことをお学びになったっていうことについてはよく分かりました。もう少し辛口の御意見をまた頂ければと思います。では、4番の方、お願いします。

(4番)

自分が裁判員裁判を経験してみたの感想ですけれども、量刑を決めるルールみたいなのがあったと思うのですが、それがもうすごくいいなっていう、これはもう是非続けてほしいなと思いました。自分の感想としてはそういう感じなんです。

(司会者)

ありがとうございます。4番の方の担当された事件は、銃を発射したという事件ですかね。その銃砲刀剣類所持等取締法違反ということで、銃を発射したり持っていたということですね。では、5番の方。

(5番)

やはり皆さんがおっしゃっていた裁判員裁判の案内が来てから、DVDとかでどんな感じだというのは事前に見ていたんですけども、やっぱりその場に行くと余りの外れなことを言っちゃいけない、何を言っているのかとか、そういう不安な気持ちで、ずっと何か緊張していたような感じで裁判に参加しておりました。

私の裁判は家族内のことで、もう争点は絞られて、もう大体どんな感じというのは分かったんですけども、でも意見をと。検察官や被告人の話を聞くことに気を取られてメモを取っていなかったの、実際ずいぶんほかの裁判員の方に助けられて、その中で良い経験をさせていただいたという、そういった感じなんです。

(司会者)

5番の方が担当された事件は、夫婦間での傷害致死事件ということですね。家庭内のことということでありましたので、担当されて何かいろいろ見方が変わったとか、そういうふうなことは、今までの間を見てもありましたか。

(5番)

そうですね、特にその辺はありませんでした。

(司会者)

ありがとうございます。それぞれ御担当された事件についての感想ということで、量刑が問題になる、それが主たる問題になる事件というのと、あと、事実認定、そちらが問題になる事件というのと両方あったんですけれども、その量刑の問題になるようなものに関する、そのルールに関することをおっしゃっていただいた方、それから平等とか公平とかそういうふうな形で自分で申し上げていただいた方、それぞれあったかと思います。これは、この後の議論の中でまたお話を続けたいかと思えます。郵便のことにつきましては、あれは裁判所から届くことがあるというふうなことでございますので、御経験されて、多分ほかの方、もしかしたら知り合いの方に届く方とかいらっしゃるかもしれませんので、是非お話しいただいて、「特に問題ないんですよ。」というふうなことで伝えていただければなと思いますけれども、後の方の、今度は具体的にお越しいただけませんかという書類につきましてはちょっと御指摘がありましたので、またいろいろ考えてみたいなというふうに思えます。

全体的なところですけども、何か全体的なところで質問とかはありますか。検察官、何かありますか。

(検察官)

結構です。

(司会者)

弁護人の方は。

(弁護士)

結構です。

(司会者)

では、今度は具体的な審理の中身につきましてお話を進めていきたいと思います。テーマの2番目ということで、審理についての感想、意見、それから検察官、弁護人の証拠開示と証拠調べの方法等というふうなところで書いてあります。

まず(1)ということで、検察官、弁護人の冒頭陳述についてということであります。これは一番最初の手続の中で、この事件について特に争点とか着目すべき点はどんなふうなところなのか、この事件はどんなふうなものである、そんなふうなことを検察官と弁護人がそれぞれ冒頭で述べる、そういうふうな場面が最初にありまして、これは証拠そのものではないんですけども、そんなふうな場面がありました。

それは端的な形で、この事件で問題となっているのは何なのか、争点はこうなんだとか、着目すべき点はこうなんだ、そんなふうな形で理解できましたでしょうか。それとも、ちょっとこういう点が分からなかったとかいうのはありましたでしょうか。率直な感想を頂ければと思います。では、1番の方からお願いします。

(1番)

私はとても分かりやすくよかったと思います。本当に法律用語とかそういうのを全然知らない人向けに詳しく書かれてあったので。裁判員制度が始まってもう5年、6年ですか。

(司会者)

はい。間もなく6年になります。

(1番)

その分、皆さんの御意見を聞いていただいて、分かりやすく修正を重ねていただいたんだというのが何かひしひしと伝わるような感じで、すごくよかったと思います。

(司会者)

検察官の方の冒頭陳述，あるいは弁護人の方の冒頭陳述というふうに，特に何か御指摘いただく点があれば。弁護人の方は，もともとはA3版のものですね。検察官の方はA4版のもの。字が細か過ぎるとか，そんなふうなことは特に感じられなかったですか。

(1番)

そうですね。紙の大きさとか書式が違うのが，どうして違うのかなという何か素朴な疑問はありましたけれども，あとは特に，分かりやすかったんじゃないかなと思いますね。あと，分からないところがあったらちょっとメモしたり何かして，できましたので。

(司会者)

では，2番の方，いかがでしょうか。

(2番)

私の場合も，両方ともとても見やすかったですけれども，あえて言うなら，弁護人の方が余り手を掛けていないなという表のつくりに感じました。検察官の方が素人にもとても分かりやすく，弁護人の方は簡潔にまとめ過ぎていて，その差が，結構その時いた人たちと話していて，「何でこんなに違うんだろうね。」というのは話し合いました。

(司会者)

2番の方の事件の場合は，今度は逆ですか。検察官の方が大きかった感じですね。それで，弁護人の方が小さかったんですね。

(2番)

弁護人の方は，表でもう簡潔にまとめてあるんですけども。

(司会者)

逆に，その簡潔にまとまっているから，どこが問題になっているかということが，逆に理解しやすかったというふうな感じではなかったのでしょうか。

(2番)

やはり緊張してきていますので、この検察官の方が、文字を読みながら「ああ、なるほど、なるほど。」と、自分的には納得できて、弁護人の方は、何回か見て、簡潔にもう最初からまとめてある、余分なことは書いていないというか、一々、一から十までは書いていないという意味では簡潔でいいんですけども、もし2回目やったとしたら、「簡潔にまとめてあるな。」と思うんですけども、やはり1回目の時でしたので、検察官の方の冒頭陳述書の方が時系列とか、言葉じゃないですけども、そういうのも細かく書いてあったので、頭に入りやすかった。

(司会者)

なるほど、分かりました。では、3番の方いかがでしょうか。

(3番)

私も冒頭陳述メモで、検察の方が1枚にまとめてくださったのが分かりやすかったですね。それで助かったんですが、その冒頭陳述を聞いていて、名前が出てくると、本当に3人か4人の名前になると、もう頭に入らなくなって、メモしていると、今度はおっしゃっていることが素通りしてしまったりで、結構、後で戻ってきての休憩時間とかでお話をさせてもらったり、またもう一度読み直したりで、それで整理がついたということが特に最初はありました。

なかなかあそこですと、何かちょっとぼうっとしちゃうとすぐ言葉が先に行ってしまうと、それで「メモしなくちゃ。」となると、メモでまた今おっしゃっていることが分からなくなって、これはよほど集中しなくちゃいけないなということを感じました。

まとめ方としては、やはり検察官のまとめ方はきちんとそれだけ準備がなされているし、ノウハウも持っていらっしゃるなというふうに感じました。弁護人の冒頭陳述は、事件の性格からも、やはり苦勞なさっているなというような感じがしました。どんなふうなことで持っていこうかということで、それが文章にすごく表れているなという感じでした。それはそれでいいんですけども、話し方が淡々とされていたのが、どこが一番注意して受けとめてほしいとか、このことを訴えたいというよう

な、そういう部分が感じられないままずらずらっといかれて、当初、それが弁護人の戦略なのかなと思ったんですが、それにしてもちょっと理解するのが大変だったなというような感じを持ちました。

(司会者)

3番の方の事件の時は、弁護人の冒頭陳述が文章式だったんですね。だから、どこがこの事件で弁護人が見てほしいところなのかというのが、ぱっとは入ってきにくかったということですかね。

(3番)

はい。

(司会者)

では、4番の方。

(4番)

自分は2番さんと一緒に、検察官さんの資料の方はすごく分かりやすくてよかったですと思います。2番さんと同じで、やはり何か弁護人さんが出している方は、本当に簡潔にまとめてあって、もうちょっと多くてもいい、もっと何か必死さを感じるような、簡潔にまとめないで、そんな感じですね。

そういえば、さっきのテーマ1にも関わるんですけども、午前中に集まって抽選で当たって、そのまま午後から確か裁判員として出た感じなんですけれども、やはり緊張しているので、より分かりやすかった検察官さんの資料と弁護士さんの方の資料というと、やはり差がちょっとあり過ぎたかなという感想は持ちました。

(司会者)

逆に、簡潔であるがために、ここを見てほしいんだということがある程度ぱっと分かるというふうな感じでは受けとめられませんでしたか。

(4番)

ものすごく簡潔にまとめてあるので、どうしても自分はその席で検察官さんの資料をよく読むようになりましたので、やはりそれに対抗して弁護人さんの方も、自

分がこういうふうに、検察官さんがこういうふうに言っているということに対しての反論ですよ。それを簡潔にまとめないで、もうちょっと強く押してほしいなという感じはありました。

(司会者)

ありがとうございます。ちょっと今、触れていたの、少しお話ししますと、当日、裁判員に選ばれた直後に裁判に入ったというふうな意見、4番の方と3番の方もそうでしたかね。ほかの方は多分、当日に選任ではなくて、別な日に選任手続だけ行って、後で裁判に入ったってことなんですけれども、3番の方は、特に当日に裁判に入ったということに関しては何か御感想とかありますか。

(3番)

当日、別にいろいろ考える間もなく始まったので、むしろ私はそれがよかったかなというふうに思っていますが。

(司会者)

裁判所も、当日にすると全体の日程自体が少し短い時間の中でできるという利点と、あと、やはり準備の時間、気持ちの整理のことも含めて要るんじゃないかということで、基本的には別な日にするようにはしているんですけども、ある程度の時間の中でできるのであれば、場合によっては当日にというふうなこともいろいろ考えたりしているんですけども、ちょっと今、御意見としては両方あったということですね。

では、冒頭陳述に戻りますけれども、5番の方、お願いします。

(5番)

検察官の冒頭陳述は分かりやすく、この先、何をしていくんだらうというぐらいもう道筋が分かって、とてもよかったと思います。

逆に、こんなこと言っているのかどうか、弁護人の方は、話の持って行き方が、また変わってきてしまうのではないかというような、そんな印象を受けるような感じでした。

(司会者)

今、道筋というお話が、要するに検察官としては、ここを見てほしい、この事件は責任能力とかが問題になる事件ではあったんですけども、こういうところがあるからちゃんと責任能力があるんだと検察官は考えて、これから証明していきます、証拠を出していきますという感じは、冒頭陳述を聞いて感じられましたか。

(5番)

はい。

(司会者)

弁護人の方は逆に、責任能力については十分にはない、十分にあるとはいえないんだということを基礎付けるようなところを指摘しようとしていたんだと思うんですけども、弁護人の意図というのは、着目点みたいなものは入り込んでこなかったという感じですか。

(5番)

そうですね。何か無理やり罪に問われないように、そこまで行く説明が自分には響いてこなかったというか、そういうふうな印象は受けました。

(司会者)

それでは、検察官、弁護人、あるいは裁判官からお伺いしたい点などあるかもしれませんので、ここで1回、検察官、弁護人、裁判官の方。

検察官の方は、何かお聞きになりたいこととかありますか。

(検察官)

特にはないんですが、検察官の冒頭陳述の永遠のテーマとして、情報量をどこまで盛り込むのかというのは、毎回、実はかなり悩んでおります。今の傾向としては、なるべく情報を少なくして、まずどんな事件かを理解してもらおうと。細かいところについては被告人質問であったり、証人尋問であったりその後の証拠調べであるとかで理解してもらおうということで、予告編という形で、なるべく細かい情報を盛り込まずに、一番の骨格の部分だけをお伝えしようというスタンスでやってはおり

ます。

今日、皆様に「分かりやすい。」と言っていただいて非常にありがたいんですけども、ちょっと一つまだ個々の検察官によって一致しない部分がありまして、それがどういう部分かというところ、着目してほしいポイントはここですということをご程度言うのかというポイントでございまして、冒頭陳述メモの中に、この部分を重視してほしいというふうにも書いて、一つ一つメッセージとして訴えるパターンと、この事件はこういう事件ですよというふうにお伝えだけして、その後、こういう被告人質問があるので、ここに着目して聞いてくださいと言うにとどめるという二つのパターンがありまして、もし差し支えなければ、どちらの方が分かりやすいかなという意見が頂ければと思うんですが。

(司会者)

要するにメッセージとして紙に着目してほしい点を書くのか、あるいは証拠調べがその後に具体的には行われますので、「こういう点に着目して、被告人質問なり証人尋問を聞いてくださいね。」というふうに口頭にとどめるのかという、そんなふうな意味でいいですか。

(検察官)

そうですね。質問の趣旨としては、先ほど、弁護人の冒頭陳述が簡潔過ぎてメッセージが若干弱いので、ちょっと訴えるものがないというか、分かりにくさにつながっているのかなという印象を私は受けたんですけども、検察官の冒頭陳述でもやはり余りメッセージを込めていないんじゃないのかなという考えもありまして、もう少しメッセージ性があった方がよいのか、違うのかというところですね。

(司会者)

どうでしょう。今度は無指名といいますか、どなたからでもと思いますけれども。逆質問でもいいですけども、3番の方、いかがですか。

(3番)

私はむしろ逆なんですね。素人考えですけども、検察官の方は客観的に事実を

しっかり教えて、知らせてもらう、むしろスポーツでいうと攻めですよ。弁護人は守りですから、やっぱり攻め口が違うと思うんです。ですから、派手に「これが着眼点だ。これがどうだ。」というような見せ方よりも、まず客観的に「この事件はこうでしたよ。これからこれで審議しましょう。」という形の方がいいんじゃないかなというふうに感じているんですね。

弁護人はむしろ守りですから、できるだけ被害が少なくするというような受け方ですから、やはりちょっと受け方というか見せ方が違っていいんじゃないかなというふうに、そんなふうに感じているんですが。

(司会者)

ありがとうございます。端的に詳し目の方がいいのか、これからの証人尋問なり被告人質問なりで聞いてくださいねっていうふうな形の簡潔論がいいのか、そんなふうな質問でも結構だと思いますけれども。では、5番の方。

(5番)

その事件の内容にもよるんじゃないかと思うんですが、私の時はとても分かりやすく、これとって意見を言うようなことはなかったです。そう思いました。

(司会者)

ありがとうございます。今度は弁護人の方から、ちょっとお聞きになりたいことをおっしゃっていただいてと思います。

(弁護士)

検察官の冒頭陳述メモとかに比べると、やはり弁護人の作成したものは分かりにくいという意見がちょっと多かったかなと思います。やはり文章だけだと分かりにくいですとか、そういった観点があるかと思うんですけれども。先ほど頭にイメージが付きやすかった、つきにくかったとかいう御発言があったかと思いますが、具体的に例えば、時系列で書いてあればイメージが作りやすいですとか、そういった何かヒントがありましたらお教えいただけたらと思うんですが。

先ほど分かりにくいとおっしゃっていて、簡潔に過ぎるという発言があったかと

思いますので、では何を付け加えれば具体的にイメージが付きやすいのかというところのヒントをいただければと思います。2番の方と4番の方ですかね。お願いいたします。

(司会者)

では、両方の方、お願いします。

(2番)

これを見て、今となればこの簡潔さはいいんですけども、当日っていうのは、今もそうですけれども素人なので、分かっている人が見るメモなのか、素人の人が初めて見るメモなのか、まずそういうふう感じて、検察官の方というのは新聞記事を読んでいるように、そんな感じで時系列とかが書いてあって、弁護側の方は、もう全部が分かっていることに対しての、それに携わっている人が見るようなメモのような気がして。ただ、今は全部が終わったので、この簡潔さの意味も分かるし。あと、ほかで言うと、検察官の方は概要の表というか、その部分をあえてほかの部分のところより大きくしたり、争点と被告人の身上経歴、情状、こういうのも大きさを変えたりとかして、目にぱっと飛び込むように、あと、先ほど3番の方がおっしゃっていたとおり、戻った時にもう一度自分で休憩中に読むとか、見比べるとか、そういうことが一からできる、ハウツー本とは違うのかもしれないけれども、素人の人が見ても分かりやすいテキストだったと、そういうふう感じました。時系列を書けばいいということではなく、何か感覚が少し違うのかな。もう少し表も文字の大きさを変えたり何かすれば、また、ぱっと目に飛び込んでくるのではないかなと思います。

(司会者)

ありがとうございます。では、4番の方。

(4番)

とりあえず、自分が立ち会ったその裁判では、単純に、検察官の方は拳銃、弁護士さんの方は鉄砲と言っていたんですね。何かそういうのがちょっと違うのかな

と感じていました。そこら辺をもう少し工夫していただければよかったかなという感じですよ。

(司会者)

担当された方がどういうお考えで異なるのか分かりませんが、拳銃というより鉄砲という方が何か少し軽いというか、そんな感じを受けられましたかね。軽いというんですかね。どんな感じなんですか。

(4番)

重い。

(司会者)

重いんですか、逆に。

(4番)

何かあからさまに本物とおもちゃという感じの話し方に単純に思ってしまったので、そこがちょっと自分は何か違和感がありました。

(司会者)

ありがとうございます。

(弁護士)

もう一点よろしいでしょうか。先ほど、5番の方、責任能力に争いのある事案だったということだったかと思うんですけども、冒頭陳述メモで私も責任能力に争いがある事案をやったことがあるんですけども、責任能力についてどこまで書くかというところをちょっと思い悩んだことがありまして、裁判員の方に分かっていただくためにある程度、もちろん解説する必要があるんですけども、ただ、そこに余りにも書いてしまうと、ほかの事実が薄まってしまったりとかしてしまうということで、ちょっとそちらの冒頭陳述メモがどういった状況だったのかが分からないところではあるんですけども、責任能力についての記述について、その冒頭陳述メモを御覧になっての御感想を頂ければと思います。

(5番)

初めてのことで、本当に内容ってどういうんだろうっていうのを、今はもう半年くらい事件の裁判から時間がたって、どういうのがいいのかって。

(弁護士)

ちょっと質問が悪かったかもしれないんですけども、その冒頭陳述を見て、責任能力をどうやって判断したらいいんだろうということは、その場でお分かりになりましたか。

(5番)

話をされている内容については、理解はできました。

(弁護士)

恐らく検察官側の冒頭陳述メモにも記載があって、弁護士側の冒頭陳述メモにも記載があってということがあったかと思うんですけども、どちらの方がより分かりやすかったとか、そういったことはございましたでしょうか。

(5番)

私の印象的には、やはり検察官のメモの方が分かりやすかった。

(弁護士)

やはり検察官のメモの方がどちらかというと分かりやすいということですけども、言葉遣いとかそういったところで分かりやすいとか、そういったところでもございましょうか。

(5番)

いや。専門的な言葉で、それを分からないとか、そういう意味じゃなくて……。

(司会者)

では、裁判官から何か。

(裁判官)

今、皆さんのお話に出ていたとおり、恐らく資料そのものだけを見て、事件について資料を読んだ時に、どっちがずっと入るかっていうのをやると、恐らくいっぱい書いてある細かいもの、先ほど2番の方がおっしゃっていましたように、新聞記

事のような方がもしかしたらすっと入るのかもしれませんが。ただ、我々が法廷の場でやることを求められている課題が何かっていうのを考えた時に、あくまでも冒頭陳述というのは口頭でのアピールなんですね。紙に基づいて、読んで我々が理解しましょうということを求められているわけじゃないんですよ。それから、先ほど来、話に出ていますけれども、選ばれたばかりでまだ緊張しているという状況で法廷に入って、これからいろんな証拠が出てくる、何に着目して自分たちが証拠を見たり聞いたりしていいのかよく分からないと、自分たちが最後どんなことを話し合えばいいのか分からないという状態の時に、我々が話すべきことはどういうことなんでしょうよと、そのためにこの証拠を見てくださいねというのがシンプルにプレゼンテーションされるのが、多分冒頭陳述としてはいいんじゃないのかなという気はしています。

なので、その資料自体のレイアウトとかの分かりやすさというのも、確かに後で読み返した時にはいいのかもしれないんですけども、最後に皆さん、評議しましたよね。いざ評議の時に、果たしてその冒頭陳述で書いてあった細かい事実関係についてまで問題にしたのかどうか、それについてまで証拠調べで一生懸命聞かなきゃいけなかったのかどうか、そういうのを振り返った時に、果たして最初の冒頭陳述で出てきた情報の量や質というものが、皆さんの議論に役立つものだったのかどうか、そういう観点で振り返っていただいた時に、どういう御意見になるのかなというのを少し伺ってみたいなというふうに思いました。いかがでしょうか。

(司会者)

多分、ちょっとしばらく前の話だと思うので、はっきり思い出すのは大変だと思われませんが。では、1番の方。

(1番)

私も普段人前に立つということも全然なくて、人前でしゃべるといってもなくて、裁判の時に、何か聞きたいことがありますかと聞かれた時に、ちょっと私以外の方々は皆さん、一言ずつ何かおっしゃったんですよ。こういう時はどうだった

んですかって、被告人の方に。一人ずつ説明を聞かれたんですけれども、私はちょっと本当にもういっぱいいっぱい、とてもじゃなくて聞けなかったの、何かしゃべるといことはちょっと頭になかったんですよ。できたら、本当に紙を見て分かるように、自分の頭で考えられるようにしてもらえるのが、私にはすごく分かりやすかったのではないかなというふうに思うんです。

(司会者)

では、2番の方。

(2番)

反論するわけではないですけれども、やはり一番最初にこのとっかかりがある方が私たちにとっては、かえって考え、この事件がどういうものなのかということ、まず知るのが大事なので、それから何日かを掛けて全員で話していくうちに、最初の冒頭陳述とかそういうのは見なくなっていますけれども、やはりメモ書きだけでは3番の方がおっしゃったとおり、書いている間に置いていかれてしまうので。だから、やはりこういうテキスト状のものはあった方がいいと思います。後半はみんな全員で話して、やはり専門の人たちがうまくリードしてくれるので、だけど、少しは自分で考えたい、どういうものなのかってということもあるので、今までどおりなのかな。これのとおりで、あった方がいいなと思いました。

(司会者)

では、3番の方。

(3番)

先ほど牛島裁判官から、プレゼンテーションだというようなことをおっしゃったじゃないですか。やはり初めてですので、プロじゃないので、どうしても分かりやすいプレゼンテーションということを工夫していただいた方がずっと入るといのはあるんですね。プロの方は本当に冷静に文章だけで、多分もう経験を積まれているから分かると思うんですが、初めて頭の中に入れていって、それでいろいろ評議していくには、分かりやすいプレゼンテーションというのは、こういう制度でやっ

ていく以上、弁護人もそうですけれども、やっぱり工夫していただいた方がスムーズに進められるのではないかなという感じです。

(司会者)

ありがとうございます。では、4番の方。

(4番)

自分もあつた方がいいです。やはりすつと選ばれてあそこの席に座って、自分は落ち着いて話を聞けるという状態じゃなかったの、文章に起こしておいてもらった方が、後々、何を言っていたのかを思い出せる機会がありました。なので、やはり文章には起こしておいてもらった方が、自分みたいな素人にはよかったです。

(司会者)

では、5番の方。

(5番)

話が進んでいって、その時、その時は理解していたつもりでいるんですけども、やはり何か忘れていっちゃう部分もあつて、こういったメモでもう一回振り返られるように、そういう内容がある程度書かれていた方がありがたいなと思います。

(司会者)

あくまで冒頭陳述は、先ほど検察官からも話がありましたけれども、予告編なんですよね。証拠調べそのものではないもんですから、だから予告編でどこを見てというふうなことを理解した上でその証拠調べに臨むという、そういう役割なものですから。ただ、その書面の在り方みたいなものについてはいろいろ伺いまして分かりましたので、これからもどんなふうなものが実は理想的な冒頭陳述なのかということとはまた議論していきたいなと思います。

それでは、次は証拠調べについてに移りたいと思います。

今度はまさに具体的に、冒頭陳述でここがポイントなんだいうところにふさわしい証拠調べがなされるというのが、目指されるべきところというふうに思われるんですけども、例えば、証人尋問であるとか、被告人質問であるとか、そういうふ

うな中で、何を弁護人は聞きたいんだろう、あるいは検察官は聞きたいんだろう、そういうふうなところを質問して答えていく、そういうふうな証拠調べの中ですつと頭に入ってこられたかどうか、あるいは、ちょっと関係ないところの質問が多かったんじゃないかとか、言葉が早口過ぎるとか、全然聞き取れなかったとか、証拠調べでいろいろあろうかと思うんですけども、これもお感じなられたところをおっしゃっていただければと思いますが、いかがでしょうか。1番の方からまたお願いします。

証拠調べの中身、そちらの方で、証拠調べの中身自体は、その紙自体にはないところでもありますので。1番の方ですと、被告人に対する質問のほかにお父さんに対する質問があったんですかね。

(1番)

そうですね。私が担当した事件は証拠とかそういうのではなくて、もう終わってしまったことがみんな分かっている、これからどういう量刑にしようかっていうイメージだったんです。本人もやったということは認めているし。その証人のお父さんに、聞いたことは聞いたんですけども、なんとなくあまり参考にはできづらかったのかなという印象でしたね。

(司会者)

刑を決めるという部分がポイントになるんだとすると、その刑を決めるという部分のためにお父さんの話を聞く、被告人の話を聞くというのは、きちんとポイントが出ていたという感じでは、何か余り印象に残るようなところはなかったという感じですか。

(1番)

そうですね。ちょっと結果に対しての量刑じゃないかなっていうふうに考えていたんですよ。放火というのがあったんで。本人も認めていて、こんな状況になってしまったというところから量刑を決めていくべきなんじゃないかなというふうにも思っておりましたので。

(司会者)

2番の方の事件は、これは否認している事件ということでありまして、被害者とされている方の証拠は供述調書という形で出てきていて、被告人がその事件で証言して、あと、情状証人もお二人出てきた、こんな形かと思います。

(2番)

私のも、本人も認めていて、証拠というより現場の何か写真を見せられたというだけで、その証拠がその後どうなるかっていう量刑に加わったっていうイメージがないんで、特に証拠調べについての良いも悪いも印象がありません。

(司会者)

実はこの事件っていうのは、結論的なことと言えば、弁護側の主張が全部通った形で、検察官の起訴した事実がかなり落ちているんですね。その辺り、被告人に、本当にこういうことがあったのかどうかって、いろいろ質問して話していただいたところというのは、すごく大きな意味を持っていたような事件ではあったんですけども、余りそういう印象というのはないですか。

(2番)

私は余り感じませんでした。

(司会者)

では、3番の方。3番の方の事件は、結局、被告人本人とあとは情状に関する証人というのがお二人来ていたという形ですね。

(3番)

武器を使ってやったという、その見せ方に関しては、非常に単純明快によく理解できました。証人尋問では、どうしても私たち素人ですから、話の言葉と一緒に目の動きとか態度とか、言動っていう部分で印象を持つじゃないですか。ですから、証人と弁護人とで本当に意思統一というかコミュニケーションできているのかなど。口では「ごめんなさい。申し訳ありません。将来きちんとしたい。」とかっていうようなのがありましたけれども、弁護人は恐らく困っちゃったんじゃないかなって、

逆に、私はそんな感じを受けていたんですね。本当に「反省している態度をとれ。」というようなことを言っているんじゃないかぐらいに、実は感じたんですね。そうすると、本人が本当にこの罪を感じて反省して服役しようとしているのかな、なんて、この証拠調べの中では、それが強く感じたところです。

(司会者)

それが、きちっと生で見ていると、そんなところを感じられたということで、分かりました。では、4番の方ですけれども、こちらの被告人質問は、事件そのものも拳銃を撃ったという話そのものと、情状とに分けて被告人質問が行われ、あとはお母さんの話を聞いたのかと思いますけれども、いかがでしょうか。

(4番)

自分のところは、もう単純明快に、拳銃と撃った場所がもう写真で見られましたので、証拠調べについては自分はこれ以上よいとか、これ以上駄目だとかという意見は、自分はないです。

(司会者)

もう基本的に網羅されて出ていて、議論する時もそれで十分ですか、それ以上は。

(4番)

はい。

(司会者)

ありがとうございます。では、5番の方は、鑑定の方に対する質問があったんですね。あとは、被告人に対する質問もあったと、こういうふうな形になりますね。尋問の意図、要するに質問している意図みたいなものとかが、うまく伝わってきたのかどうかという視点ではどんな感じでしょうか。

(5番)

争点は罪に問えるか、問えないかですね。その精神状態が普通というか判断できる状態か、できないのか、そうじゃないのかと。証人の方が来て、そこで発言されたことで随分、その場にいた裁判員の方ももやもやしていたものが取れたような感

じです。

(司会者)

ありがとうございます。鑑定人の証人尋問は非常にある意味理解することができて、議論の結論を出すにもすごく役に立ったと、そんな感じでしょうか。

(5番)

とても重要なものだったと思います。

(司会者)

検察官、弁護人の方で何か質問がありましたら。では、検察官の方から。

(検察官)

2番さんにお伺いしたいんですが、恐らく2番さんの事件は一部犯罪事実について争いがあって、その部分を検察官は供述調書で立証しようとした事件だったと思うんですけども、その供述調書で話をしている本人から話を聞きたいなというふうに思われたことがあったのかどうかを教えていただければと思うんですが。

(司会者)

結局、被害者とされている方は来られないということで供述調書、それを朗読するという形で証拠調べをしたんですね。被告人はその場にいるので直接話が聞けるんですけども、被害者とされている方の御本人からの何かお話を聞きたいというふうに思われたかどうかという、そういう質問になります。

(2番)

そうですね。聞きたいと思いましたが、実際、彼が言っていた言葉というのが、どちらかというと弁護士の方と相談したようなそんな感じの受け答えに思いました。自分からも一つは質問させてもらったですけども、それは素直に答えていただけでよかったと思います。

(検察官)

ということは、被害者の方本人から聞いたか、聞かないかで結論が変わるような事件ではなかったという印象なんですかね。

(2番)

そうですね。場合が場合で、性に関しての事件だったので、女性が出てこないのも想像つきましたし、本人ももう最初から認めていて、争う感じはなかったですね。量刑に関してだけ話し合っているのかなって。あとは、追起訴の方であった、強盗か強盗ではないか、それに関して話ししていましたが、被告人の方はそれは絶対として認めていなかったで、被害者の女性の方も出てこないで、それはもう淡々と事が進んで。

(検察官)

その部分について被害者御本人から話を聞いたら、何か変わった可能性があるかというところなんですけれども。

(2番)

もしかしたらあったかもしれないですね。同じ女性なので、その被害に遭った場所も、自分の友達の家近くだったので、いろいろ想像はしてしまっただけ。だから、もしかしたらあったかもしれないし、専門家のお二方にリードされて、そういうことは考えないと。公平に考えるということをちょっとずつ、ちょっとずつ洗脳されていたので、変わらなかったかもしれません。

(検察官)

ありがとうございました。

(司会者)

では、弁護人の方から。

(弁護士)

証拠調べでということではあるんですけども、皆様、それぞれ情状証人の方がいらっしやっただけかと思えます。皆さん、お呼びになった方、親御さんであったりとかしたかとは思いますが、それぞれその情状証人の方の話を評議においてどこまで参考にされたかというところをお聞かせいただきたいと思えます。どなたでも構わないので。

(司会者)

情状証人のお話をどの程度参考にされたんでしょうかということですね。5番の方には、情状証人とかはいなかったですね。あの方には、情状証人はそれぞれいらっしやったということになります。では、4番の方。

(4番)

自分の時はお母様が参られて、言っていたんですけども、必死でやっぱり謝っていました。やはりあれは心に響きました。

(司会者)

ありがとうございます。3番さん。

(3番)

先ほどそういったことは話ししたと思うんですが、私の場合にはむしろ、この証人で情状をするというような部分は全く考えませんでした。むしろ心が入っていないというのか、真剣に反省しているから、将来、刑が終えてからきちんとした社会人として生活していくために手だてを整えているよ、というような、そういう内容で証人になったんですが、それがどうも心に全く響いてこないという、この人に任せて大丈夫なのかなというような、逆な印象を受けましたね。ですから、その程度の証人しか出られなかったということで、さっきちょっと言いましたけれども、弁護人は本当に苦労しながら集めたんじゃないかなと、むしろ感じたようなところでは。

(司会者)

よろしいですか。あと、裁判官からということ。

(裁判官)

もう皆さんがそれぞれの事件を担当されてから随分時間がたっているので、少しお忘れになっている部分もあるのかなと思って。私自身も必死に思い出そうと思って頑張っているんですけども、実際、情状証人であれ、被告人質問であれ、最初裁判員の皆さん、我々裁判官と一緒に段の上でずっと検察官の質問を聞き、弁護人

の質問を聞き、我々が次、聞ける番というふうに回ってくるわけなんですけれども、検察官や弁護人がしている質問について、何でそんな質問しているのかなと、もっとこういうことを聞けばいいのというふうに思われた場面とか、そういうのがあれば是非教えていただきたいんですけれども、いかがでしょうか。もう随分前のことなので、なかなか思い出せないかもしれませんが。

(司会者)

どんなことでも、是非、辛口の御意見を頂くと非常に助かりますので。

(3番)

私のは、暴力団と暴力団ですから、どちらも、どうも良い印象がないままに入っただんですが、唯一弁護人がこれを強く訴えて聞いてもらえる内容かなと思ったのは、確か東北震災の時に、困っている人たちにトラックで夜がけで行って、いろいろ炊き出しをつくったり、何か精力的に、体力があるからそれで、そういう奉仕活動をしたっていうようなことがあったと思うんですが、私もまだら模様になってきましたけれども、そういうようなことが唯一、本当に善意の心を持って社会のために真剣に動いたんだって、この一点だけでももっともっと弁護人の方が聞いたり、引き出したりしたらいいんじゃないかと。ほかに余りないんじゃないって、そんな感じまで受けましたね。

(司会者)

着目、今、良いところと思われるところがそこだとしたら、そこをもっと強調して聞いた方がよかったんじゃないかということですね。では、1番の方。

(1番)

証人尋問にお父さんだけが呼ばれたんですけれども、私以外の裁判員の方もやっぱりそんなようなことを言っていたんですが、「お兄さんはどんな気持ちだったんだろうね。」なんてみんな話していたんですね。だから、どうしてお兄さんでなくてお父さんと呼んだのかなっていう疑問がありましたね。何か直接の引き金になったのが、そのお兄さんが言った言葉が原因だったんじゃないかなっていうふうに思っ

たんですけれども。それが聞けたら、もしかしたらちょっと変わっていたのかもしれないなっていうふうには思いましたね。

(司会者)

ポイントをきちんと話を聞ける方なのかどうかというのも分かりませんが、その方が被告人のためなのか、あるいは逆の方に行くのか分かりませんが、その方がよく理解できてっていうふうには思われたということですね。ありがとうございます。

意図がよく入ってきましたかという話の質問なんですけれども、では証人尋問、被告人質問に限らず、何か証拠でこういうところが分かりにくかったので、こういうところはもう少し工夫した方が、工夫というか証拠なので出し方、出せる証拠というのももちろん決まるというか限られてはいるんでしょうけれども、こういうところが分かりにくかったとか、そんなふうなことでも結構ですけれども、証拠、書類関係でも、図面とかでも結構ですし、何かございますか。

さっき、供述調書と証人というふうな視点でのお話がありましたけれども、証拠書類なんかに出てくるようなものでも、ちょっと分かりにくい記載だったから、ちょっと証拠書類が意味が取りづらかったとか、そういうのもあろうかと思えますけれども。特にそういうのでありませんか。できるだけ辛口で言っていた方が、今後の運用のためということもありますので。

ちょっと逆の視点で、また私から聞いてよろしいですか。

特に例えば、3番の方にお伺いしますけれども、例えば傷害致死での状況みたいなもので、お部屋の状況とか、被害者の状況とか、そういうふうなものはもう事実には争いが無いことを前提として、量刑を考える上ではもう必要十分に大体出ていたというふうな、そんなふうな印象でしょうか。

(3番)

印象としてはそうです。正確にきちんと一つ一つ正しいかどうかというところまではなかなか判断できなかったんですが、大きな流れの中では、これは間違っていない

ないだろうなっていうような印象を持ちながら、いろいろ考えていきました。

(司会者)

特に、4番さんが言ったように、過不足の関係でおっしゃっていましたが、特に現場の客観的状況みたいなものに関して言えば、大体十分にものを考えられるようなものは出ていたというふうな印象ですか。

(3番)

はい。

(司会者)

では、証拠については、この辺りにいたしましょうか。

次に検察官の論告、求刑、弁護人の弁論ということで、これは証拠調べの結果を踏まえて検察官が意見を述べる、弁護人が意見を述べるということで、これも資料の中に入っているかと思えますけれども、それぞれ御意見を頂くという形で進めました。何かその論告、求刑、弁論につきまして、御感想、御意見など頂ければというふうに思います。例えば、端的に言うと、非常に分かりにくい、分かりやすいでも結構ですし、何か求刑の意味とか分かりにくかったとか、分かりやすかったとか、弁論で主張したいことが分かりにくかったとか、分かりやすかったとか。どんな視点でも結構です。では、5番の方、お願いします。

(5番)

最後の方は、どちらかといえばもう大分話が整理されていたので、特にそこであえて疑問を感じるとか、そういったことはなかったです。最後、証人の方が来た後は、もう大分すっきりしていたので。

(司会者)

証人尋問でよく理解できていたので、特に論告とか弁論とかもよく分かったと、そんな感じでいいでしょうか。

(5番)

そうですね。

(司会者)

では、4番の方。

(4番)

自分はここまで来ると、検察官の言いたいこと、弁護人の言いたいこと、求刑もすごく分かりやすかったです。

(司会者)

その求刑の根拠みたいなものというのも、すっと頭に入ってくるような感じでしたか。

(4番)

はい。

(司会者)

では、3番の方。

(3番)

求刑の論告メモは1枚なので非常に分かりやすくて、そういう意味では「なるほどな。」ということで、理解はできました。弁護人は、むしろ全て罪は認めていますので、「反省していますので、できるだけ情状酌量をお願いします。」という、そういうスタンスでずっと来て、自分からは何年とか、そういうような具体的な数字も何もなく、ただ、「できるだけ短くお願いします。」と、お涙頂戴みたいな、そういう流れではあったと思うんですね。

ですから、そういう意味では、何か弁護人の趣旨としたら、ちょっと物足りなかったかなという、「お任せしますので、できるだけ少なくしてください。」というような、そんな感じは受けましたね。

(司会者)

ありがとうございます。では、2番の方。

(2番)

私も3番の方と同じように、争う姿勢も感じられなくて、弁護側が、「もう罪も認

めているので、できれば少なく。」というのを感じて、両方とも、検察官も弁護側も争っている感じもしませんでしたし、自分はやはりこの時点では検察側、弁護側、両方とも何を言っているかは、素直に頭に入ってきました。

(司会者)

ありがとうございます。それでは、1番の方。

(1番)

私も、求刑や弁論は言っていることもすんなり入っていったような気がします。

(司会者)

ありがとうございます。それでは、検察官とまた弁護人から、ちょっと質問がありましたらということで。では、検察官。

(検察官)

非常に言いにくそうにされていたので恐縮なんですけれども、5番さんの事件は、私が論告を担当した事件なんですけれども、正直言ってしまうと、弁護側が何を言いたいかは検察官としても分からないので、どのような論告をしたらいいのかわちよつと分からないという迷いもあって、鑑定の尋問で疑問を解消していただけたかなという実感はあるものの、やはり弁護士と検察官の責任能力というの、法律概念に関する主張なので、そういう部分はやはり整理して検察官の主張を出さなければいけないと、そういう思いがあって、ちょっと冗長になってしまったかなという反省点があって、「長くて、こんなにいっぱい言わなくてもよかったよ。」とか、そういう印象を持たれなかったかなってお聞きしたかったんですけれども。

(司会者)

5番の方、いかがでしょうか。

(5番)

特にそれは感じなかったです。

(司会者)

もう少し、辛口の御意見を頂ければ。

(検察官)

ここで詳しくお聞きして申し訳ないんですけども、要するに、鑑定人の尋問を聞いて、ある程度もう分かったので、検察官の論告を聞かなくてもある程度もう疑問は解消されているので、検察官の論告はもっとコンパクトで構わないという意見にも聞こえたので、いかがなのかなと。

(5番)

さっき言った意味は、言いづらいとかそういうわけではないです。別に感じなかったです。

(検察官)

ありがとうございます。

(司会者)

では、弁護人。

(弁護士)

求刑に関しては根拠も含めて分かりやすかったという話もあったと思うんですけども、弁護人の意見について4番、5番の方は言っておられなかったかなと思うんですが。最終的な結論に至る理由ですね、それがすんなり頭の中に入ってきたかどうかというのは、いかがだったでしょうか。こういった弁護人なりの結論が、きっと意見が、あったかと思うんですけども、その理由をすんなり、「そういう理由だったら、そういう結論になるよね。」というような御感想があったかどうか、お聞きしたいと思います。

(司会者)

4番の方と5番の方、どうですか。

(4番)

自分の時は、もう被告人さんが認めていましたので、弁護人さんの方も半ば半分お叱りをしていましたので、すっと入ってきました。

(司会者)

5 番の方。

(5 番)

弁護人の方はやはり被告人を守る立場から、争点である原因がこういうことになったというところで、量刑の減刑があるということ、本当に証人の先生がいらして、そこで弁護人の方の質問に対してのやりとりとかを聞いていまして、そこでもう明確にお答えされていたので、もうそこで異論もなく、先に行けたと思います。

(司会者)

よろしいでしょうか。

(弁護士)

あと、2 番の方は、一部、検察官の主張を認めなかったという結論になっていると今お伺いしたんですけれども、そちらの点について、弁護人の弁論がこういったところが良かったからやっぱりその印象が残ったとか、そういったものがありましたらお教えいただければと思います。

(司会者)

2 番の方。

(2 番)

正直言うと、弁護人の方のその辺の「間違いない。」という、そういう熱さみたいなのは正直感じませんでした。淡々と、ほかの罪も認めてということ、テレビだと、その被告人がいかにも、こういう状況でこうなって、実際、事件を起こしてしまったかわいそうな人だろうみたいな、そういうイメージがあったんですけれども、あんまり検察の人と言うことは変わらない感じの、口調的には冷たい感じに思ったので。追起訴は、被害者の方が出てこないで、やはりこっちのいる人の言葉が優先されたのか、それに関してはお金だったので証拠がないということで、その辺は個人的にはそんなばかなとは思ったんですけれども、私の時の弁護人の男性は余りそういう被告人をかばう的なことは感じませんでした。

(弁護士)

そうしますと、御感想としては、もっと被告人の親身になって、テレビで見るような弁論の方がよかったのではないかと思いますか。それとも、淡々とした方が、よかったのではないのかなというような御感想でしょうか。

(2番)

そうですね。今回の事件では被害者が同じ女性なので、やはりあんまり犯人がかわいそうだろう的にやると「は?。」とかって思ってしまうので、それは逆に、今回の場合は淡々でよかったと思います。

(司会者)

では、時間もかなり押していますので、テーマ3の方に移りたいと思います。

評議、判決についての感想、意見ということになります。

冒頭にテーマ1のところ、公平性であるとか、平等であるということについて触れられておっしゃっていただいた方がいらっしゃいましたが、ちょっと守秘義務に関するところもありますので、十分に意見を述べることができ、争点に対する判断ができたというふうに思われるかどうか。公平の観点ということで言えば、例えば量刑検索システムについてはどう思うかとか、そういうふうな視点で、2点ですね。十分に意見が述べることができ、その争点に対する判断ができたというふうにお考えになられるかどうか。あと、量刑検索システムの位置付けのようなものについて理解できましたかと、そんなことをお伺いしたいと思います。

では、1番の方から。

(1番)

量刑のシステムは、全国でどこで同じような罪を犯しても同じような裁き方をされるんだなというのは、目安としてあった方がいいと思います。

それと、あと評議も、何か裁判官の方たちがメインで、裁判員裁判の私たちは何ていいますか、補助みたいな形の位置付けなんじゃないかなというふうに思っていたんですけども、同じ1票なんだというのがちょっと新鮮というか、びっくりしたっていう感じですかね。裁判官の方は2票なり3票なり持っておられてもいいん

じゃないかなという気がしたんですけれども。みんな平等なんだなっていうのがちよつとびっくりしました。

(司会者)

ありがとうございます。では、2番の方。

(2番)

最初、その量刑の見本みたいな一覧ではないですけれども、それは休み時間にみんなで、「なあんだ。テキストあるんじゃない。茶番だね。」っていうことを、最初は言っていたんですよ。けれども、やはり自分たちが考えるのはどうしても被害者寄りの意見というか、被害者がいかに苦しんでいるかということで、新聞を見た時に殺人があれば、「え、何でこの人が数年で出てくるの。」という感情があるけれども、裁判というのはそうではなく、検察だけでなく弁護人だけでなく、両方の間をとる公平さというのをお二方、もう一人お若い方に教わって、基本というもの、見本ではなく基本だになってことが後々感じました。あと、裁判官のいないところで、みんな自由で意見はしていました。やはり裁判官の方がいると言えないところもありましたけれども、でも、裁判官と全員が集まった時にも、自由にそれなりに意見は言えたと思います。それから「裁判官の人たちも大変だね。」ということは、みんなが言っていました。

(司会者)

ありがとうございます。では、3番の方。

(3番)

私も最初、自分なりに思っていたことは、判決で出した年数よりも大分多いんですね、わたしは、人が、父とはいえ、死に至っているんだから、検事さんが出した懲役の年数よりも、もっと多くていいんじゃないかなっていうふうに思っていたんですね。ところが量刑システムの説明をもらいますと見事な富士山型で、一つの大きな山があって、そこを基準にして考えていった方がいいんじゃないか、いくべきだというようなことで、そうだなと思って、自分なりに考え方をやはり変えたわけ

なんですね。ところが終わった後、私も感じて、ここにあるから、多分言っちゃっていいんでしょうけれども、求刑は10年だったんですね。私は検事さんがいろいろ論告したり、勘案したりなさっていることを、ほぼ「いいな。」と評価しているのに、求刑よりも少ない年数にしたということはどうだったのかな、なんて、その時、自分なりに悩んだところです。ただ、その量刑システムで判断すると、やはりそうじゃないだろうというようなことがあったんですね。ですから、一般素人から見ると、今、2番の方がおっしゃったように、ちょっとこの法体系は、やっぱり人を死に至らしめるような時に、そういうのが甘いんじゃないかなってというような気がするんですね。

逆に、こういった5年間ぐらい裁判員裁判が過ぎていきますから、その裁判員裁判をやった影響で判決が多少変わってきたとか、こういうような傾向が出てきたってというようなことがもっと、きっと資料としてはあるんだろうと思いますが、私が知らないだけかもしれませんが、世に出していただけたらな、なんていうように感じています。

(司会者)

システム自体は全てのものが入っているんですけども、多分いろいろな検証報告書とかというようなものも公開されているものとかもございまして、そういう中で、こういう判断についてはこういう傾向だっというふうなもの、ある程度分析されたものというの、少し出ていることは出ていますし、多分ホームページなんかでも見られるものはあるかとは思いますが、では、4番の方。

(4番)

自分はこれ、担当した事件、事件でやっぱり感想が変わってくるんだと、今思いました。それで、自分の担当というか裁判員で出た裁判について、このシステムについては、大いに参考になりましたし、良いものだと思いました。なので、やっぱり続けてほしいなと思います。

(司会者)

ありがとうございます。では、5番の方。

(5番)

自分の思っていることを主張できましたし、その刑を決める時の大体一般的な、全く同じ事件ってないですけども、そのシステムはとても参考になりました。それで、検察官が求刑されているのもその事件の中で一番重いところをとったところを出しているのです、そこよりも、そのシステムのほかの刑を出して見比べた時に、裁判官とかからもいろいろ説明があったので、とても判決、皆さんで御一緒に決める時に参考になったと思います。

(司会者)

ちょっと時間が押していますので、評議、判決につきましては、なかなか守秘義務の関係もありますので、いろいろその中で話していただいてありがとうございます。では、テーマ4の最後の部分に移りまして、その後、質問の時間ということにしたいと思います。テーマ4の、これから裁判員になられる方へのメッセージ、あるいはアドバイスなどを頂ければと思います。1番の方からお願いします。

(1番)

メッセージ、アドバイスですね。私たちは終わった後に、ちょうど男4人、女4人だったんですね。最後に女同士で「お茶して、それで帰ろうね。」と小田原駅の駅前のところでちょっとお茶して帰ったんですけども、勤めている方は上司の方にこの裁判員裁判の紙が来たんだって相談したら、どうなるだろうな、ちょっと忙しい時期も時期だったんで大丈夫かなって、言ったら割と快く送りだしてくれて、「ちょっと結果を教えて。」というので何か言われたなんていついたらしいんですけども、それと、私もちょっと知り合いに何人か話したら、もう何か夢の世界みたいなことで、もう絶対私には来ないって何か頭から信じている人が多かったんです。私もそうだったし。

いざなってみて、日程も全部ちゃんと決まっていたし、すごく緊張はしたんですけども、なかなか人生でそういう場面ってないんじゃないかなっていうふうに思

ったんですよね。それで、頭の良いインテリの方たちとお話しする機会も頂いたし、私としてはとてもよかったんじゃないかな。自分自身にもプラスになったんじゃないかなっていうふうに思います。

(司会者)

ありがとうございます。では、2番の方。

(2番)

メッセージとしては、やった方がいいと思います。分からないことだらけで不安ですけども、こういう、ある程度の道筋は引かれているし、分からないことがあれば必ず答えてくれる方たちがいらっしゃるの、やった方が自分のためにもなると思います。裁判というものがどういうものか、これで少し分かった気がしたので、私はそう思いました。

(司会者)

ありがとうございます。では、3番の方。

(3番)

私も2番の方と同じような考えなんですけれども、最初はどうしても全く異次元世界の話のようで、ちゅうちょする方がほとんどだと思うんです。私もそうだったんですが。でも、こういう経験をしてみると、どんな場違いな意見でもきちんと聞いていただいたり、方向を修正していただいたり、そういう流れをつくってくださるっていう、大変良い経験をしたと思うんですね。

大分たってからいろんな方々にそんな話を友人ともしていて、気がついたことは、これ、選挙人名簿から選ばれるっていうことは、選挙権という権利を持っている人間が国のために、やはりより良い国をつくるために選ぶんだよっていうことなので、大変でもこれは参加すると自分のためにもすごくなるっていうふうに感じています。そんなメッセージを新しく案内の行った方に伝えたいなと思っています。

(司会者)

ありがとうございます。では、4番の方。

(4番)

これから裁判員になられる方へのメッセージというので、当日、自分は外れるつもりで、Tシャツとジーパンで来ちゃったんです。ある程度服装を見ていただければ外してくれるのかなと思って、あえてそういう格好をして来たんですけども、やっぱりある程度常識ある服装で来た方がいいと思います。

(司会者)

ありがとうございます。では、5番の方。

(5番)

私も当日まで、自分が選ばれるなんてことは思っていなくて、抽選で自分が選ばれてしまって、ちょっと気持ちがブルーなところがあったんですが、でも、実際、なかなかこのような経験はできないですし、周りを見ても何人って、一人しかいないんですけども、一人ぐらいしかその裁判員を経験したという話も聞かないですし、こういったところでちょっと自分、場違いかなと思っても、そういった意見も出して、それで周りの裁判員の方たちとも調整もとれて、自分の意見でとてつもなく変な裁判の結果にということもないので、是非、当選された方は受けて裁判に出られたらいいと思います。

(司会者)

ありがとうございます。非常に温かいお言葉を頂きまして、皆さん、本当にありがとうございます。では、ちょっと押しましたが、新聞記者の方が来られているので、ちょっと質問がありましたら質問の時間を取りますので、質問ありましたらどうぞ。

(神奈川新聞)

去年の秋から裁判を担当しているので、恐らく皆さんの事件はどなたも見えないと思うんですけども、一般的な質問で、最近よく裁判員裁判の経験者で急性ストレス障害になったですとか、あと、裁判員がすごく精神的に負担になったですとか、そういったことが大分取り上げられるようになってきていて、例えば、そうい

った裁判員裁判に出ることによって精神的な不安感があったりですか、あとは、その裁判員裁判を終わった後に、これでよかったんだろうとか、気持ち的に引きずる面があったのかどうかというのを伺いたいです。

あと、裁判員裁判に出ると1週間ぐらいの拘束、拘束というか仕事等を休まなければならないですけれども、その場合、周囲の、主婦の方とかもいらっしゃいますけれども、その間の家事とか仕事とかはどうなっていたのかというのを伺いたいです。

(司会者)

2点質問があったということで、裁判員としての精神的な負担みたいなものと、その間の仕事なり家庭なりということで、それをどうされていたかという、その2点ですね。では、1番の方からよろしいですか。

(1番)

幸いなことと言っていいのかどうかちょっと分からないんですけれども、私の担当したのは、犯人も自首してきているし、亡くなった方もおられなかったし、量刑に対してもそんなに重い罪でもなく終わったんですよ。新聞なんか載っているようなちょっと本当にひどい事件や何かの写真を見せられて何か大変なことになったとかというのは、聞いてはいたんですが、もし私が本当にそういう大変な事件の担当になったらどうしようっていうのはあるんですけれども、でも、義務として出なきゃいけないんじゃないかなというのは思います。

あと、仕事の方なんですけれども、私は主婦なんですけれども、その通知が来た時に、「なっちゃったんだよ。」っていうふうに言ったら、一応、家族の者たちも、そんなに手の掛かる家族はいなかったっていうのもあるんですよ。介護しているとか、小さい子供がいるとか、そういうわけでもなかったんで、本当にタイミングもよかったんだと思うんですが、迷惑にならない形でできたと思います。

(司会者)

では、2番の方。

(2番)

私の方も特に何の障害もなく、自分の案件も、心の傷以外は特にはないと思うんですよ。亡くなったとか、流血があったとか、そういうものを見せられるということもなかったのです。この裁判員裁判も約6年近くですので、そういう方が中にはいてもおかしくはないと思うんですが、ほとんどの方が大丈夫なのではないだろうかとか、そう思います。家のことですがけれども、私の周りの家族はもう「行ってこい。やってこい。」で、何の問題もありませんでした。うちも家族全員が、もう子供も成人なので手が掛からない。ただ、男性の方はやはり仕事をしていると、そういうのがきちんと断れる理由になると、もう少し出る人、出ない人、簡単に分けられるんじゃないかなと思います。

(司会者)

では、3番の方。

(3番)

私の関係した事件は、それこそリンチに似たような暴行事件だったんですが、大変配慮されていて、写真なんかほとんどなかったような気がするんですね。イラストみたいなものとか、あとは言葉で説明とかですね。そういった精神的な負担にならないように、工夫はすごくされていたなっていうふうに感じます。

それで、「もし何か悩み事とか出たら、いつでも相談に乗りますよ。」というようなことも言われていて、そういうことでケアをすごくしながら進めてくださっているなというふうに感じたんですね。根が鈍感ですから、余計にそういうものは感じなくて、精神的には私自身は何も残らなかったですね。

あと、時間拘束の問題ですがけれども、私自身はリタイア組で、現役ではありませんので、時間的には全然問題なかったですね。ただ、一緒に集まってきた8人の方の中には、現役とか若い方とか、仕事をしている、大変苦痛だって、もう夜中に帰って仕事を慌ててやらなくちゃいけないと、いろいろおっしゃっている方がいました。自分も現役時代を思い出して、確かに3日間、終日拘束されたらつらいだろう

など思うんですね。ただ、こういった制度を定着させるためには、やっぱり日本的な風土ですよ、仕事が終わっても会社を帰りづらいとか、有休がとりづらいとか、そういったことと同じような観点から、これを改善していかなくちゃいけないってことで、むしろマスコミの方なんかもそういうふうな啓蒙をさせていただいて、この制度を定着してほしいなというふうに思っています。

(司会者)

では、4番の方。

(4番)

自分はもう本当にストレスはありません。自分は職人をやっているんで、とりあえず休みは自由にとれる職種なので、全然問題なかったです。ただ、俺の人工よりこっちの手当をもうちょっと高くしてほしいなとは思っています。

(司会者)

じゃ、5番の方。

(5番)

私の担当というか、事件ですけれども、裁判は殺人だったんですが、死体も、殴られた方の写真とかそういうのも出ることはなく、図で見せたいところに、その凶器でやってどんな状態になっていたとか、もう図だったので、全然そこら辺は写真、動画も見ることなく、それはもう本当に配慮されていたので、精神的にどうこうとか、そういうふうなものもなく、最後まで行くことができてよかったです。

それで、実際、仕事ですけれども、本当に1週間束縛されるときついなというのは、全く会社に任せて、自分はその間、専念できたかというところ、そういうわけでもない部分もありましたけれども、でも、会社で話した時に、周りの人たちの協力が得られたので、そこは問題なくできたと思います。

(司会者)

ありがとうございます。もう時間ではありますけれども、よろしいですか。

(神奈川新聞)

ありがとうございます。

(司会者)

それでは、最後に裁判官、検察官、弁護人から一言お願いします。では、裁判官。

(裁判官)

本日は、もっとお聞きしたいところっていうのはいろいろあったんですけども、こうして審理を一緒にさせていただいた皆さんと集まり、今の段階で振り返ってどうだったのかというのを御意見を伺うことができ、大変勉強になりました。今は、本当に裁判員制度というのが始まって6年近くたちましたけれども、一件一件、皆様の頂いたアンケートや御意見というのを基に、より良いものにしていくためにはどう工夫ができるのかというのを我々も考えて取り組んでいるという状況であります。そういった中で、こういう場、直接、アンケートとかじゃなく、皆様のお考えをお聞かせいただけたというのは非常に勉強になったなと思います。

今後とも皆様の御意見を生かしてより良い裁判にしていきたいなど、改めて思いました。本日はどうもありがとうございました。

(司会者)

では、検察官。

(検察官)

本日はどうもありがとうございました。今日の意見をお聞きして、ルールは敷かれているとか、公平性をかなり要求されるというようなお話があって、昨今の新聞報道とかでもあるように、裁判員の方が参加する意義であったりとか、やりがいというものをもしかしたら余り感じていただけていないんじゃないかというような不安もあったんですけども、今日のお話をお聞きして、非常にやってよかったという御意見を頂いたり、非常にこういう刑事裁判について高い関心も頂いていると、いろんな御意見を頂きまして非常にうれしく思っております。本当にありがとうございます。今後の検察官、検察庁として、分かりやすい裁判、あるべき刑事訴訟の姿を追求していきたいと思っていますので、今後ともよろしく願いいたします。

(司会者)

では、弁護人。

(弁護士)

本日はどうもありがとうございました。やはり弁護人側には、より分かりやすい裁判が求められているかなということは実感させていただきました。ただ、一方でちょっと被告人のそれが不利になってはいけないということもありますので、どのようにすればより被告人に不利にならない方法で分かりやすい形を取らせていただくかというところは、改めて弁護士会内でも検討させていただいて、それを共通認識化して今後の裁判員裁判に生かしていきたいと思います。本当に今日はありがとうございました。

(司会者)

では、これで意見交換会は終了ということにさせていただきます。本日は、本当に長時間お時間頂きましてありがとうございました。更に謙虚に、良い裁判を目指して進んでまいりたいと思います。どうもありがとうございました。